

第2回神戸川の河川環境に関する専門委員会 意見発表要旨

【日 時】平成24年9月30日(日) 13:00~16:10

【場 所】朱鷺会館 1階 大ホール

【発表者】深井 徹郎:神戸川来島ダム水利等調整委員会(委員)

岩崎 知久:NPO 法人しまね体験活動支援センター事務局長

林 要一:神戸川再生推進会議会長

【内 容】

■深井 徹郎 氏

(発表内容)

- 水利等調整委員会の規約には毎年開催することとなっているが、平成18年以前は一、二回の開催に留まっていた。
- 環境放流について、昭和58年の第1回の更新時に時期と流量が設定されたものと承知しており、以前はそういう設定はなかったのではないか。
- 平成10年以降だと思われるが、ダムの底水が出るという話があるようになった。志津見ダムができれば水質が改善されるだろうと期待していたが、解消されず、澱んだ状況と川面が黒くなった状況になっている。
- 窪田、乙立の二つの発電所の取水堰でどちらも100%取水し直下流には水無し状況の減水区域を作っていたが、先般、両堰とも改善された。
- 来島ダムの竣工から数十年前までは、環境放流というものがあまりされていなかったし、県の河川課も、或いは中電もそういった認識が本当に薄かった、或いはなかったのではないか
- 下流の馬木で水量が確保され来島ダムが放流を止めると中流域では急に水位が下がる。両ダムの運用にも問題があるのではないか。直下流の影響も考慮すべきと思う。
- 環境放流される堰堤付近の水は長期貯留水であり、取水口が堰堤上流3kmとかなり上流にありこれが水質悪化の最大の原因ではないか。
- 来島ダムの放流口は最大 2m³/sの放流口であり、来島ダム単体としては流量の確保がなされない。
- 今回で江の川の分水は止め神戸川独自でできる発電を考えてほしい。

(質疑応答)

- ・川の水がおかしくなったのは十数年前からとおっしゃっていたが、毎年少しずつ変化しているのか。(中野委員)
⇒毎年変化していると思う。大災害の後は一時的にきれいになるが、川の魚がどこにいるのか見えなくなった。特に今年が顕著。(深井氏)

- ・志津見ダムが昨年6月から放流しているが、昨年からの変化はどうか。(中野委員)
⇒ますます悪くなってきたと思われる。今年は顕著に悪い。今年は夏の高温で両ダムとも大量のアオコの発生もあったが、これが毎年続けば大変なことになる。(深井氏)

■岩崎 知久 氏

(発表内容)

- 斐伊川・神戸川流域環境マップづくりを10年来やっているため、ここから色々と見えてきたことをお話したい。
- まず、子供たちに「実際に川にどれくらい行きますか？」というアンケートを取ってみると、400人の回答で72%が川に行かないという結果となった。
- このまま子供たちが大人になれば、山や川を知らない人間が、国土や地域を守ることになる。自然や環境の変化に気づかないために、危険が回避できなかつたり、命や生物多様性の大切さなどを認識できない人たちが増えるのではないかと心配して何とかしなければならないという気持ちになった。
- 2002年から始めて、延べ1万人を超える子供たちが川へ直接入って水質調査を体験した。事業で得られた効果としては、教員自身の川への関心と指導力が向上し、子供たちが河川調査を行うことで、川の生き物に対する関心が高まったり、環境保全に対する意識の向上が図られた。
- 斐伊川・神戸川流域環境マップづくりを通して、10年前とここ1～2年を比較すると、精度の問題はあるが、神戸川の水質は少し悪くなっている。
- 河川環境へ影響を与えたものとして、昭和の年代では、高度成長期の大量消費型スタイル、山の保水能力の低下、水路のコンクリート化、河川流量の不足等、平成の年代では、ダム建設、生活汚水、農業用肥料の流出、外来種による生態系の影響等が考えられる。
- マップづくりの検証として、「こんな川だったらいいな、楽しそうだなと思う川はどんな川ですか」というアンケートを取ってみると、魚や虫がたくさんいる川にしてほしい、水がきれいな川にしてほしい、というのが上位だった。
- 『生き物が暮らしやすい川』を作るためには、安定した水量の確保、水質の保全が必要ではないか。例えば、自然エネルギーを使ったダム水の水質浄化や、数年間をかけてダム水を試験放流し河川に生息する生物と水量の関係を科学的に調査することなどが必要ではないか。
- 『誇りに思える川づくり』を目指して、私たち流域住民が取り組んでいかなければいけないこともあるのではないかと。協働による水辺や河川景観の維持、緑のダムである山の環境保全などを行うことが私達流域住民と行政で行うことができるのではないかと。
- 子供たちが体験活動を通じて思い描いた神戸川の姿は『多様な生き物が生息できる川』になって欲しいとの願いであり、これを実現するために私達大人がそれぞれできることを取り組んでいかなければならない。

(質疑応答)

- ・子供たちが実際川の中に入って川の状況を知るということは非常に重要な体験である。人間は水がなければ生きていけない生き物である。これからも続けていければ非常に素晴らしいものになると思う。(中野委員)

- ・水質調査は定点的に観測を行っているのか。(野中委員)
⇒定点とまではいかないが、学校の近くの川などほぼ同じ場所で調査している。(岩崎氏)

・近年は川の水が少し汚いという結果が出ているが、岩崎氏も同様なお考えか。
⇒同様の考えである。(岩崎氏)

2003年にオオサンショウウオが見つかったが、その後どうなったのか。(野中委員)
⇒しばらく様子を見ていたが、自然に上流に帰ってしまったのか、姿が見えなくなってしまった。
(岩崎氏)

■林 要一 氏

(発表内容)

- 日本が戦後、産業が壊滅的なことになったため、来島ダムは国策として電源開発法に基づいて、大義のもとに昭和31年に完成した。流域住民もそういう大義を念頭に置いて、30年間水利権を中国電力に貸与した。
- 昭和59年に一旦は反対ののろしが上がったが、結果的には更に30年間更新し、今年度までとした。
- 我々が60年間、誠心誠意国策に従って協力した。その代償として、神戸川が残念ながら死の川になった。
- 出雲でも唯一大規模な資産である神戸川が負の資産になってしまったということで、非常に我々流域住民は慚愧にたえない。
- 橋波の方で子供が川で泳ぐのに古着を着せられている。いかに川が汚れているかということ。
- 八神地区と馬木地区において流量不足していた日があると新聞報道されていた。またその両地区の記録が約7年間記録がないということ。島根県は河川管理者としての責任を果たせていないのではないか。
- 河川環境管理基本法および自然再生推進法に基づき、河川管理者は自然環境に係る計画を策定のうえ管理するべきである。
- 神戸川の正常流量については、十分に水深等が確保されているというが、一昨年古志橋から下流でアオコが発生している。
- 馬木地点で4.4m³/sの水を流すことについて、放水路の関係で下流の川幅が4倍に広がっているため、4.4m³/sでは流れない。そのため、古志橋周辺の合流点から下流はほとんど水が動かない。いわゆる沼のように、ほとんど澱んでいる。
- アンケート調査について、一般の方が理解しがたいような設問をされること自体おかしい。このようなアンケート結果をもとに判断されると間違った結論がでる。

(質疑応答)

なし